

Title	「～だか」という言い方
Author(s)	田野村, 忠温
Citation	大阪外国語大学論集. 6 p.123-p.133
Issue Date	1991-12-15
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/79552">https://hdl.handle.net/11094/79552</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 「～だか」という言い方

田野村 忠 温

## 1. はじめに

等しく「終助詞」の名で呼ばれるものであっても、終助詞によって構文的な性質が異なるということが知られている。具体的に言えば、それぞれの終助詞は、一方では、終助詞どうしの相互承接の可能性において、他方では、「～だ」という形をした述語への続き方において、固有の性質を有している。この小論では、実際の用例の観察を通して、終助詞の后者の性質——終助詞が「～だ」という形の述語に付くとき、そのまま付くのか、それとも、「だ」を落としてから付くのかということ——の一端を明らかにしてみようと思う<sup>(1)</sup>。

例えば、終助詞の「ぞ」や「わ」が「学生だ」という述語に付くときは、そのまま付いて、「学生だぞ」「学生だわ」のようになるのに対し、「さ」や「か」の場合は、「だ」が省かれて、「学生さ」「学生か」となる。「～ださ」という言い方は、明治期の資料中に見出されることが報告されている<sup>(2)</sup>が、それに先行する江戸語においても、また、現代の東京方言においても、一般に使用されない。

もっとも、「だ」が表現されるか、省かれるかという問題は、見かけほど単純なものではない。例えば、「ね」という終助詞の場合、「学生だね」という言い方と「学生ね」という言い方とが両方可能であるが、このことから直ちに、「ね」は、「だ」を表現してもしなくてもよい、と言ってすませることには問題がある。正しくは、「ね」は「学生だね」のように「だ」を省くことなく表現するものであり、「学生ね」という言い方は、「学生だわね」から「だわ」が落ちた言い方として解釈すべきであろうと思われる。「よ」も、この点において、「ね」に準じる<sup>(3)</sup>。

さて、ここで特に問題にしたいのは、「～だか」という言い方の可能性である。上述したように、「～だ」という形の述語に終助詞「か」が付くときは、「だ」を落として、「～か」となるのが普通である。しかし、例外的に、「～だか」という言い方が用いられることもある。すでに別のところで述べた<sup>(4)</sup>ことであるが、これは、後ろに、「分かる」「知る」「覚える」「忘れる」「言う」などの表現が続く場合（または、そうした表現が省略されていると理解できる場合）、しかも、「分からない」「忘れた」「覚えているか」のように知識の欠如や不確かさが問題になっている場合が多いように思われる。そして、次に示す(1)～(5)のようにいわゆる疑問詞とともに用いられるか、

- (1) どれがどれだか分からなくなってしまった。
- (2) どれがどれだか覚えていますか？
- (3) どういうつもりだか知らないけど、全くねえ…。
- (4) さあ、どうだか。
- (5) 何だか寒いわね。

もしくは、(6)～(7)のように二つ（または、それ以上）の選択肢を並べる形で用いられる。

- (6) イギリスだかフランスだか知らないけど、どこにでも行ったらいいじゃない。
- (7) 拾って来たんだか盗んで来たんだか分かりゃしない。

以下においては、実際の用例に基づいて、この「～だか」という言い方の使われ方を少しばかり詳しく探してみようと思う。

なお、念のために注意しておくとして、「～だ」という形をした述語と言うのは、「学生だ」のような名詞述語や「親切だ」のような形容動詞述語がその代表的なものであるが、それらに限られてはいない。加えて、「～するのだ」「～しそうだ」を始めとする形式名詞を含む述語もそうであるし、さらには、「来月からだ」「東京までだ」「太郎とだ」「油断しているからだ」のようなものもすべて含まれる。

## 2 「分からない」またはそれに類する述語との組合せにおける用法

### 2.1 「分からない」

「～だか」という言い方の用例のうち、最も多いのは、「分からない」という述語との組合せにおけるものである。

「～だか分からない」の用例のうち、まず、いわゆる疑問詞を含むものから見てみよう。以後、疑問詞または疑問詞を含む表現のことを記号「X」で表すことにすると、「Xだか分からない」という言い方である。種々の疑問詞それぞれにつき、一、二例ずつ示す。まず、(8)～(9)は、「何」を含む例である。

- (8) 「わざわざ、係長さんが（家まで）見えたりして、どうしたんですか？」「さあ何だかよく分かんない。」（「けものみち」）
- (9) 「（あの）おじいちゃん、不思議な（政治的な）勢力を持っているのね。外から考えると、何が何だか分らないわ。」（「けものみち」）
- (10)～(11) は、「いつ」「どこ」を含む例である。
- (10) 「ちょっとご覧にならないこと？」「またこの次。」「あんたのこの次はいつのことだか分かりゃしないわ。」（「真知子」）
- (11) 「へえ、旦那のいないときに、健吉さんのほうから（電話を）かけられることがあります。だけど、熱海も直通ですから、いきなり電話番号を回せばすぐにつながります

ので、わたしどもには(健吉さんの電話先が)どこだか分かりません。」(「雑草群落」)

(12)～(13)は、「どんな」「どんなに」を含む例である。

(12)「(あれは)<sup>ひと</sup>他人の愛人さんだ。こちらはマネージャーとして頼まれてお世話してただけよ。」「どんな世話だか分かるもんか。」(「けものみち」)

(13)「ほんとにそうとなると、どんなに安心だか分かりませんわ。」(「波の塔」)

(14)～(16)は、「どう」「どういう」を含む例である。

(14)「昨夜なんか(おまえのことが)気になって、ろくに寝られなかったくらいだ。」「どうだか、分かったもんじゃないわ。あんたも口がうまいから。」(「雑草群落」)

(15)「あなたは今でも自分が天使だと信じていられますか?」「いや、どうだか分かりません。」(「野火」)

(16)庄平は、駒井が健吉に何か用があって来たらしいとは見当が付いたものの、「どういう目的だか」よく分からない。(「雑草群落」)

また、次に示す(17)～(19)は、「～のだか」という形をした例である。

(17)「あれじゃ何のため久しぶりに東京へ出て来たんだか分かりゃしない。」(「真知子」)

(18)「でも、どうして米子さんが殺されたのだか分からないわ。あんた、知ってるでしょ?」(「けものみち」)

(19)「なら分かてるんじゃないありませんか。」「いいえ、分からないわ、——何だってお姉さんまであんな話(＝わたしの縁談)に口を入れる気になるのだか。」(「真知子」)

「～だかは分からない」という形の例もあった。

(20)庄平は、あらためて市外電話の番号案内に電話した。「潮風荘というんですがね、旅館ですが、熱海の何町だかはよく分かりません。」(「雑草群落」)

「～だか分からない」の用例のうち、疑問詞を含まないものは、「AだかBだか分からない」という形を取る。次のようなものが、その例である。

(21)稲田は営業部に(参与という名目で)配属されたが、これという仕事はなかった。それでも善良な彼は、進んで雑用のようなことをした。「参与」だか小使だか分らなかった。(「雑草群落」)

(22)ウルドゥ語だのアラビア語だのを、彼らが右から左へ書く術を眺めると、我々はまず仰天するし、それが文字だか記号だか分からぬのを見ると、ますますびっくりする。(「月と10セント」)

(23)三四郎は近ごろ女に囚われた。恋人に囚われたのなら、かえっておもしろいが、ほれられているんだか、ばかにされているんだか、こわがっていいんだか、さげすんでいるんだか、よすべきだか、続けべきだかわけの分からない囚われ方である。

(ママ)

(「三四郎」)

次のように、「AだかXだか分からない」という形をした例もある。「AだかBだか分からな

い」と「Xだか分からない」とが合わさったものと言えようか。

- (24) 「じゃあんたはどう？竹尾さんがきらいで（嫁に）行かないってより、きらいだか何だか本当にはまだ分からないんでしょう？」（「真知子」）

## 2.2 「分からない」に類する述語

「分からない」以外の述語でも、確実な知識の欠如を意味するものは、「分からない」と同じように、「～だか」という言い方と組み合わせて用いられることがある。

次に示すのは、「知らない」という述語の例である。

- (25) 「誰だか知らないがそんな田舎まで行って（いろいろ話して来るとは）、その人もよけいなお世話じゃありませんか。」（「真知子」）  
(26) 「どういう人なの？」「知らないわ。どんな職業の人だか」（「波の塔」）  
(27) 「ちょっと、高尾さん。この女、誰なの、いったい？どこの馬の骨だか牛の骨だか知らないけれど、ずいぶん高慢ちきな顔をして聞くわね。」（「雑草群落」）  
(28) 古本のことで口をかけてやろうと思っている佐野周平にしても、電力会社の何かの課長だか、次長だか知らないが、わずかなサラリーで満足している。（「落差」）

「知れない」という述語の例もある。

- (29) 「どこの人が描いたのだか知れないものを買うやつはいない。」（「雑草群落」）

次に挙げる (30) ～ (32) は、それぞれ、「はっきりしない」「怪しい」「疑わしい」という述語を含んでいる。

- (30) 「まだ相手はどこの女だかははっきりしないらしいわ。」（「雑草群落」）  
(31) 「電話、どこからだったの？ほんとのこと言ってちょうだい。」（中略）「商売上の客だと言っている。」「何だか怪しいもんだわ。……ねえ、もしかすると、女の人じゃない？」（「けものみち」）  
(32) 美禰子は与次郎に金を貸すと言った。けれども与次郎には渡さないとやった。実際与次郎は金銭のうえにおいては、信用しにくい男かもしれない。しかしその意味で美禰子が渡さないのか、どうだか疑わしい。（「三四郎」）

ほかにも「忘れる」「覚えていない」なども「～だか」と組合せて用いられるものと思われるが、実例は見つからなかった。

なお、(32) は、2.1でも見た「AだかXだか」という形の表現を含んでいる。また、(27) も、単なる「Xだか」や「AだかBだか」でもなければ、「AだかXだか」でもなく、むしろ、「X・AだかBだか」とでも表すべき構造を有している。

### 3 「分からない」を補って考えることのできる用法

#### 3.1 「～だか」による終止

「～だか」の用法の中には、「分からない」やそれに類する述語を伴ってはいないが、後にそうした述語を補って考えることのできるものがある。

これには、まず、「～だか」で文を終わる言い方がある。その中でも、「どうだか」という言い方が特に多い。こうした「～だか」は、文末に位置してはいるが、主文の述語ではなく、従属節の述語と見るべきであろう。その後ろに「分からない」などの述語が省かれていると見ることができるし、そう見るのが自然であろうと思われる。

- (33) 「相当なアパートにいるようだが、料理屋の女中の収入だけでああいう部屋が借りられるかな? (中略) やっぱりスポンサーがついているんだろうな?」「さあ、どうだか。」

(「雑草群落」)

- (34) 「だから、あんな人は、すぐそばに女性が身体をすり付けて行っても、女には興味がないから、あんたが焼きもちを焼くような心配はないのよ。」「どうだか。おれにはまだ信じられないけど。」

(「雑草群落」)

後ろに「ね」を伴う「～だかね」という形の例も多い。

- (35) 「(あの小滝さんは) 相変わらず、社長の娘さんのあとを追いかけているんですか?」「どうだかね。」「先生は小滝さんとグルだから、あの人に不利なことは言わないのね?」

(「けものみち」)

- (36) 「焼け出された人は、どこに行ってるんでしょうか?」「さあ、どこだかね。それぞれ知合いのところに入り込んでいるんだろう。」

(「雑草群落」)

#### 3.2 挿入句としての「～だか」

「<sup>なん</sup>何だか」という形は、挿入句的に使われ、「はっきりとは分からないが(～と思われる)」というような意味を表すこともある。次の(37)がその例である。

- (37) 「何だか、そのままにして帰ったら悪いような気がしたんです。」

(「波の塔」)

「分からない」という述語が省かれていると見るべきかどうかは別として、そうした意味を読み取ることができることは明らかであろう。

上の(37)の例は「何だか～気がする」という形をしているが、このように、挿入句的な「何だか」は、しばしば、「気がする」「思われる」「見える」「ようだ」といった、話し手の漠然とした思考や印象を表現する述語との組合せで用いられる。

- (38) 「村上為蔵さんだって、(老舗の) 中山とは別に、おもしろい道具を持っている骨董屋があれば、案外、受け付けてくれるんじゃないですかね。何だか、そういう気がしますよ。」

(「雑草群落」)

- (39) その都度、あとで和子は適当な言いわけをしていたが、庄平は何だか言いくるめられたような気がしないでもなかった。(「雑草群落」)
- (40) 今(電話に)出た女の声は女中に違いないが、何となく受話器から受ける感じでは、大きな旅館のように思えない。声の背後が静まり返って、何だかこじんまりとした家と見えた。(「雑草群落」)
- (41) 庄平には和子のその上眼づかいが気になる。いつも彼のことにはあまり気を遣わない女が、何だかこっちの顔色を見ているように思えるのだ。(「雑草群落」)
- (42) そう(＝その男が同性愛者だと)聞いてみると、何だか、その身体もいくらか華奢に見えてきたから不思議だった。(「雑草群落」)
- (43) 「いつでもあんなの?あの人。」「あんなって?」「何だか、怒ってるみたいじゃない。」(「真知子」)

また、「何だか～したい」という形で話し手の漠然とした希望を表現するものや、「何だか寒い」などのように話し手の漠然とした感覚を表現するものもある。

- (44) 「ただ模写だけではおもしろくない。(中略)絵は、写楽なら写楽、春信なら春信本人がどこまでも描いたというような出来で、しかも、これまでにない図柄というのが欲しいですな。(中略)(そのようなものを)描いてくれますか?」「何だかそう教えられと、自分の考えでやってみたくまりました。」(「雑草群落」)
- (45) 庄平は、あの絵を何だか村上社長のほうに渡したくなかった。(「雑草群落」)
- (46) 「きょうは(お帰りが)早いんですね。」「うむ。何だか寒くてしょうがない。すぐ蒲団を敷いてくれんか?」(「雑草群落」)
- (47) 「ここも、今夜で最後だと思うと、何だか名残り惜しいな。」(「けものみち」)
- (48) 「ねえ、あんた、この旅館には、どういうつもりでやって来たの?」「別にどうということはないよ。噂でこの家のことを聞いたので、ちょっと来たくなっただけだ。」「ほんと?何だか変だわ。」(「雑草群落」)
- 「何だか」を含むその他の例をいくつかまとめて挙げておく。

- (49) 「あんた、何だか奥歯にもののはさまったようなことを言うわね。……ちゃんとはっきり言ってみたらどう?」(「雑草群落」)
- (50) 「もっとも、駒井も詳しいことは言わなかった。何だか、歯に衣を着せたような、いやに思わせぶりの言い方だった。」(「雑草群落」)
- (51) おかみが作法正しく座敷を出ると、和子が箸で刺身をはさみながら、「何だか旅館のおかみさんらしくないわね。」と、早速、批評を下した。(「雑草群落」)
- (52) 何だか、そういったまとまりのない夢だった。(「雑草群落」)
- (53) こちらは足腰に老人性凝固が来ているのと、何だか重い西部の皮アブリのため、馬の腹もうまく蹴れぬ。(「月と10セント」)

ちなみに、次のような例に見る「何ですか」は、この挿入句的な「何だか」の丁寧体の形と考えてよからう。

(54) しかし今宵の温気にはその部屋はいくらか暑過ぎた。「何ですかむしむしいたしますこと。」 (「真知子」)

(55) 「お嬢さま、お電話でございます。」「どこから?」「鈴木様とかおっしゃるようですが、何ですか混線してははっきりいたしませんので。」 (「真知子」)

挿入句的な「～だか」の用例としては、以上見てきたような「何だか」のそれが圧倒的に多いが、調べた範囲では、「誰だか」の用例が一つだけあった。

(56) 「知ってる人に誰だか色(＝政治色)の付いた人があるのね。米子さんの結婚したってことも、そこいらから分かったらしいの。」 (「真知子」)

### 3.3 名詞句相当の「～だか」

「～だか」が文中で一つの名詞句に相当する役割を果たしていることもある。

(57) 「この上の展望台へ行くエレベーターは?」「そんなものはない。ここが終点だ。」  
「しかし、九十何階だかまで行けると聞いていたぜ。」 (「月と10セント」)

(58) だいたいセントラル・ヒーティングなどというものはご立派な洋館にお住いの方々がお備えになるべきもので、うちのような建売住宅には不釣り合いなのだ。小学生が髭を生やし、(中略) NHKが四千人収容の大ホールを作り世界で何番目だかの大パイプオルガンを備え付けるようなもの、まるで似合わぬ。 (「家庭口論」)

これらも「分からない」というような意味を含んではいるが、「分からない」という述語を単純に補うことはできない。強いてそれを補ってみれば、「九十何階だか分からないが、そこまで行ける」「世界で何番目だかよく覚えていないが、そのような大パイプオルガンを備え付ける」のようにでもなろうが、自然な言い方にはならない。

上の(57)～(58)は疑問詞を含む「Xだか」という形の例であったが、「AだかBだか」という形の表現が名詞句相当として用いられていることもある。

(59) (大リーグでは) 打者も、糞ボールをやすやすと空振りしたりする。しかし、まともにバットに当たると、腕力だか技術だかで、アッという間に、ボールは外野のフェンスを越してしまう。 (「月と10セント」)

(60) おまけに当時、小さな島国の日本は世界の強国になりつつあって、本当に自分が兵隊になってドンドンパチパチをやらかし、あっぱれ戦死をしてしまったとて、なおかつ「万歳!」と叫び、苦しいながらもうっとりとした表情で、天国だか地獄だかへ行けた時代であった。 (「月と10セント」)

ここでも、「AだかXだか」という形の例も見られる。

(61) すると、その大男のいかつい制帽をかぶった車掌だか何だかは、わたしを列から離れ



るように合図した。 (「月と10セント」)

- (62) それにしても、いやしくも自分で自分をイヤになる中年男となったわたしを、誘惑  
だか何だかしようと企むとは、何という野郎であることか。 (「月と10セント」)

次のように、「AだかB」という不完全な形の例もあった。

- (63) (バス待ちの列に並んで) やっとバスに近づいたとき、係だか車掌がその十メートルく  
らい手前で、先に金を受取っていた。 (「月と10セント」)

- (64) わたしは寝酒だか昼酒に睡眠薬を混ぜて飲み、どこかの航空会社でもらった黒い眼帯  
をかけ、寝たふりなりともしようと試みた。 (「月と10セント」)

以上のように「～だか」を名詞句相当のものとして用いる用例は、あまり一般的ではなく、特定の作家に集中して現われるに過ぎないようである。

#### 4 「分からない」を伴わず、それを補うこともできない用法

##### 4.1 「当ててみなさい」の類

「～だか」という言い方の用例の中には、頻度は高くないが、「分からない」やそれに類する述語を含んでもいなければ、そうした述語が省かれていると見ることもできないものがある。

まず、次のように、「～だか当ててみる」という形の例がある。

- (65) 「何ですか？これは。」「何だか、当ててご覧？」 (「雑草群落」)

- (66) 「当ててご覧なさい。どのくらい古いんだか。」 (「それから」)

「～だか考えてみる」という言い方の例もある。

- (67) 「そんなわがままが、この世間で通るものだかどうだか、よく考えてご覧。」  
(「真知子」)

- (68) 「母さんがこうして気をもんでるのを、何かよけいなおせっかいでもしてるようにあ  
んたは思ってるんですか？考えてご覧。あと二月たてばいくつになるのだか。」  
(「真知子」)

次の「～だか見てみる」も同類である。

- (69) 「よく見てご覧なさい。どこの夫婦も始めみんな好きになって、あの人でなければな  
らないって結婚したのだかどうだか。」 (「真知子」)

これらは、いずれも、「分からない」という述語を含んでいないばかりか、それを補うことも不可能であり、その意味で、2～3節で見てきた「～だか」の種々の用例とは一線を画している。しかしながら、(65)～(69)の共通点として気付かれるのは、「当ててご覧なさい」「考えてご覧」と、命令したり催促したりしているものであるということである。さらに言えば、「これが何であるか」「どのくらい古いのか」「そんなわがままがこの世間で通るものかどうか」等々の問いに対する答を話し手自身は十分に承知しており、それを認識していないと思われる聞き手に対

して考慮を促しているものであることが分かる。こうしたことから、(65)～(69)に見るような「～だか」の用法も、聞き手の認識していないことがらを問題として提示しているという意味において、「分からない」という述語との接点を有しているものと言える。

次のような、「～だか聞いてみるといい」「～だか知ってる？」という形の例についても、同様である。

(70) 「じゃ (あなたにとって関さんが) 友だちじゃないって断言し得るんですね?」「友だちじゃありません。」「しかし、真知子さん、友だちでなければ……。」「何だか、わたしより関さんに聞いてみるといいのよ。」 (「真知子」)

(71) 「鮎ちゃん、勉強するわねえ。そんなに勉強して面白いの?でも、男は勉強しないとだめね。一生勉強するのよ。わたし、だんだん、勉強する人が好きになるわ。なぜだか知ってる?」 (「あすなろ物語」)

どちらの例においても、聞き手は認識していないと話し手が見込んでいることがらが、問題として設定されていると言える。

#### 4.2 その他

これまでに見てきた「～だか」の用法の諸類型のどれにも収まりがたい例もごく稀にはある。まず、

(72) 新聞記事は人の名前をみんな隠していた。某社長とか、某技官とか、他人には分からないが、もちろん、庄平には誰のことだかははっきりしている。 (「雑草群落」)

という例は、「分からない」という述語を補うこともできないし、4.1で取り上げた種類の表現のように、聞き手の無知を前提としたものでもない。もっとも、ここでも、「庄平」以外の読者にとっては「某社長や某技官が誰のことであるか」が分からないという点に着目すれば、「分からない」という述語との接点を見て取ることも不可能ではない。

次のように、「～だか」に続く述語が省略されている例もある。

(73) 「いい加減にもう帰ってくれんか。」「いやだ。明日の朝まで、ちゃんとしていてあげる。そして、女が来るまで待っていてあげるわ、どんな女だか……。」「弱ったな。」 (「けものみち」)

書き手が「……」の部分にどのような表現を想定していたかが明らかでないが、「この目で見届けるまで」といった表現であろうか。ともあれ、「どんな女であるか」を話し手は現時点において認識していないわけであるから、その意味では、「分からない」という述語と無縁ではないと一応は言える。

しかし、このような場合まで「分からない」という述語と結び付けて考えることがそもそも妥当なのか、妥当だとすればどの程度にまで妥当であるのかという問題は検討を要するところである。次のような例では、そうした結び付けを試みることは始めから無理であろう。

(74) 民子にかっ<sup>と</sup>と血がのぼ<sup>って</sup>て来た。瞬間に見た着物の女がだれだか、すぐ見当がついた。

(「けものみち」)

ともあれ、検討の材料となるべき類例に乏しいため、ここでは明確な判断を下すことは保留せざるを得ない。

## 5 江戸語の「～だか」

以上、「～だか」という言い方がどのように使われるものであるかについて見てきた。

この言い方の発生の時期や経緯も興味深い問題である。筆者はそうしたことをよく明らかにする者ではないが、近世江戸語の資料の中にも「～だか」は見出される。

まず、「分からない」またはそれに類する述語を伴う例としては、次のようなものがある。

(75) 「コリヤアこまつたもんだ。何だかかだか、さつぱり分からなくなつて、もともこも  
うしなつたよふだ。」 (「東海道中膝栗毛」)

(76) 「ハハハ、おめへがたは何をいふやら、どつちがどふだか、さつぱり分からなくな  
つた。」 (「東海道中膝栗毛」)

(77) 「アへ、さうだよねへ、お夏さん。」「どうだか、<sup>わたくし</sup>私はしらんよ。」 (「浮世風呂」)  
「分からない」を補って考えることのできる例としては、次のようなものがある。

(78) 「うさアねへ。その代に(地獄には)情があるめへ。」「そこはどうだか。」 (「浮世床」)

(79) 「サア、参らう。ヲヤ、おまへ袂から何だか落しました。」 (「浮世風呂」)

(80) 「誰だか糠袋をあけた。あのざまはい。いけぞんざいな。」 (「浮世風呂」)

(81) 「アへいてへいてへ。急に腹がいたくなつて来た。そして何だかぞくぞく寒気がして  
ならねへ。」 (「春告鳥」)

「～だか言いなさい」などの形の例もある。

(82) 「そしてネ。」「なんだ。」「おねがひがあります。」「なんだか早く言な。」 (「春告鳥」)

(83) 「大かた深く言合した情人があるだらう。何所のだれだかそれをいつて聞せな。」

(「春告鳥」)

こうした(82)～(83)のような言い方は、現代語では例が見つからなかったが、現代語でも可能であろう。

以上のように、江戸語の「～だか」は、現代語のそれとほぼ同じ用法を示すものと見てよさそうである。もっとも、次のように、現代語の感覚からすると不自然な言い方も稀にはある。

(84) 「ヲヤヲヤ何だかとぞんじましたら若旦那がマアとんだことをおつしやいます。」

(「春告鳥」)

これは、現代語であれば、「何かと思ひましたら(思ったら)」などと言うところであろう。また、次のような反語的な表現における「～だか」の使用も、現代語では一般的ではないように思う。

- (85) 「沈魚落雁閉月羞花(=美人の形容)ときてゐる。」「何落雁だか。岩おこしほどな大粒な痘痕があるけれど、上塗に工数がかゝつたから見えねへ。」(「浮世床」)

また、次のように「XだかYだか」という形をした例もあるが、このような言い方は、現代語でも不可能ではないかも知れないが、少なくとも一般的ではなからう。

- (86) 「何所に実心があるか何だかわからねへ様じやア(後略)」(「春告鳥」)

なお、以上の(75)～(86)の例が、共通して、疑問詞を伴っているという点が注意を引く<sup>(5)</sup>。少数の用例のみに基づいて断定的なことは言えないが、このことは、「～だか」は本来専ら疑問詞とともに使われるものであったことを意味しているのかも知れない。すなわち、「Xだか」という言い方が先にできて、「AだかBだか」や「AだかXだか」などの言い方は後になって生じたという可能性を想像することができる。

## 6 おわりに

筆者の個人的な体験の限りでは、「～だ」の代わりに同起源の「～じゃ」や「～や」を用いる方言において、「～じゃか」「～やか」という言い方が用いられるのを耳にしたことはないように思う。とすれば、「～だか」という言い方は、東京または東京を含む地域の方言だけに見られる現象であるのかも知れない。ともあれ、「～だか」の発生の経緯、その歴史や分布などについての理解は、今後の研究に待つことにしたい。

### 注

- (1) 渡辺実氏「終助詞の文法論的位置——叙述と陳述再説——」(『国語学』第72集、1968年)が、初めて終助詞を構文論的な視点から体系的に考察された。
- (2) 鈴木英夫氏「明治東京語の過渡的性格——『～だサ』という言い方をめぐって——」(『国語と国文学』第54巻第9号、1977年)。
- (3) 詳細は、拙著『現代日本語の文法Ⅰ——「のだ」の意味と用法——』(和泉書院、1990年、補説A)を参照していただきたい。
- (4) 注(3)に同じ。
- (5) (85)の例だけは、「何」を疑問詞と見るべきかどうか、はっきりしないところがある。

### (用例の出典)

現代語の資料からの引例に際しては、以下の書名を出典として示した。なお、文字や記号の表記を変更したところがある。

井上ひさし「家庭口論」、井上靖「あすなろ物語」、大岡昇平「野火」、北杜夫「月と10セント」、夏目漱石「三四郎」、同「それから」、野上弥生子「真知子」、松本清張「波の塔」、同「けものみち」、同「雑草群落」、同「落差」

江戸語の用例の出典は、以下の通りである。

「浮世風呂」「東海道中膝栗毛」(以上、岩波日本古典文学大系)、「浮世床」「春告鳥」(以上、小学館日本古典文学全集)

(1991. 9. 13 受理)